

韓国「西学」関連探訪記

安部 力

はじめに

ここで言う「西学」とは、「西洋の学術文化」を指している。本稿では、17世紀初頭に朝鮮半島に伝来した、中国経由の「キリスト教を含む関連学術文化」を意味する言葉、として扱うこととする。それは、現代の韓国にも連綿として受け継がれており、「現代韓国」を考える上でも必要不可欠の要素である。

17世紀初頭に朝鮮半島に伝来したキリスト教関連学術文化については、多くの先行研究があり、筆者も既に言及したことがある(1)。しかし、現代の「西学」と「17世紀以降の西学」とのつながりを念頭に置いた現地調査は、日本では管見の及ぶ限りでは見あたらない。そのため、「17世紀」に始まる西学関連施設や遺址をめぐり、同時に現在のキリスト教会をも訪問して、17世紀朝鮮朝から現代の韓国までにつながる「西学」の流れを把握しようとする試みが本稿で報告する現地調査である。また、筆者は「東アジアにおけるキリスト教徒の意識や状況」について既に台湾や中国で現地調査を行い、報告を行っている(2)。

今回のこの韓国における調査はその一貫であり、その作業を通して、東アジア(特に台湾、中国、韓国)におけるキリスト教を取り巻く状況やキリスト教徒の意識についての比較、検討を行う予定であるため、所謂「西洋的価値観」であるキリスト教がどのような形で現代の「東アジア」に受け止められているのか、その当事者であるキリスト教徒はどのような意識や問題を抱えているのか、などについて考えることとする。その際、「現代的課題」と過去の「歴史的な課題」との共通点や差異点についても視野に入れながら、現代的課題に向き合うこととした。これは、歴史を顧みることによってその解決策が提示できるのでは、と考えるためである。更に、東アジアにおけるキリスト教の状況を歴史的・時間という時系列と、東アジア各国の状況という地理系列との複合的な視点からアプローチすることによって、各国の状況を立体的に浮かび上がらせることも目論んでいる。

これらが今回の韓国調査に赴く際の目的であったが、筆者自身が初の韓国調査であったため、どこまで達成できたかは今後の進展次第である。しかし、今回の

訪問によって、今後の調査に結びつく人的ネットワークの構築、及び現代韓国における「西学」研究の状況、そしてキリスト教を取り巻く環境の一端については、手がかりを得ることができたと考える(3)。

以上、今回の訪問研究の目的及び本報告の主旨について述べてきたが、次章では、本報告で扱う「西学」と関連する歴史について概観しておきたい。

一 韓国(朝鮮)における「西学」概観

韓国における「西学」と「キリスト教」とは、その伝来当初から一体であった。それは、16世紀末に東アジアに到来し活動した、カトリック・キリスト教(以下、場合に応じて「天主教」とする)の修道会であるイエズス会士が中国に於いて、その活動に協力的な士大夫等と共に著した所謂「漢訳西学書」が、韓国(当時の「朝鮮」)に、北京に赴いていた赴京使(燕京使、燕行使などとも)によって将来されたからである。早くは17世紀初頭に「坤輿万国全図」や『天主実義』がもたらされたとされ、その点についても既に研究が蓄積されている(4)。

そして、そのような状況の中で、18世紀に入った頃、李瀼(字は子新、号は星湖、1681〜1763)やその門人たち(「星湖学派」)によって本格的な研究が始まる。そして李瀼の弟子達によって「漢訳西学書」の研究は継続されていき、その結果、李瀼の門人は「西学」、とりわけ天主教に対する姿勢によって大きく二つに分かれていくことになる。一方は天主教教義に傾倒した「信西派(星湖左派)」と呼ばれる人々であり、これらの人々が朝鮮天主教会を成立させる中心になっていくが、彼らは天主教を学び、信仰を始めた当初から批判や迫害にさらされる。その一つの原因が、星湖学派のもう一方である「攻西派(「星湖右派」)」と呼ばれる人々による、天主教を「邪教」とする批判である。

李瀼自身は、将来された「漢訳西学書」について「是々非々」の態度で臨み、たとえ「宣教師であるイエズス会士」等の著作であっても、「有用」とであると判断した著作については肯定的な評価を与えている。この時期に「天主教」に対してその危険性や欺瞞性について批判を行った人物としては、最初期の弟子である慎後聃(「西学弁」)以外には殆ど見当たらない(5)。

このような状況の下、星湖左派の人士を中心に朝鮮のカトリック・キリスト教教会である「朝鮮天主教会」が設立されるが、その過程は以下の通りである。

1783年に、北京に赴京使として赴く李東郁の随員として息子の李承薫が随行し、当時北京で布教活動を行っていたグラモン神父（中国名は梁棟材）から洗礼を受けて翌年に帰朝、当時天主教に傾倒していた李蘗や権哲身に洗礼を施した（この三人は「韓国天主教の三礎石」とされている）。しかし、その出発当初から多難であった。例えば、1785年には、天主教徒の集まりが官憲に発見され、中人階級の信者である金範禹が刑死し（乙巳事件）、これにより一時、天主教徒に対する監視の目が厳しくなった。このような情勢を受けて、当時、政治的にも学脈的にも星湖学派の中心人物であった安鼎福は学派の状況を憂え、天主教に傾倒する同学の士に警鐘を鳴らし、天主教批判の文章である「天学考」「天学問答」を1785年に著すこととなる。

そして、朝鮮に於いて天主教に最初に接触した人々、つまり漢訳天主教書に接した知識人（主に両班層）は、その後、様々な教会運営上、教理上の疑問が噴出するに及んで1789年末と1790年末に、北京に信者である尹有一を派遣するなどした。その際に、北京主教であったフランシスコ会のグヴェーア神父は、祖先祭祀の禁止を指示した。これは朝鮮儒教社会の支配階層であった両班層にとって大きな出来事だったが、大部分の両班信徒は祖先祭祀を止めることはなかった。ところが、李蘗の死後、1791年に珍山郡の両班である尹持忠が母親の祭祀を止め、位牌を壊してしまったという理由で、親類の権尚然と共に斬首刑を受ける事件が発生した。この事件を境に、星湖左派で朝鮮天主教教会に関わった人々特に両班階級の人々は激しい政治的な弾圧を受けていくこととなり、これより以後、李蘗が評価した「実学的性格」を強く持つ漢訳西学書も、天主教との関わりが深いと判断され、その研究への圧力が次第に高まっていくことになる。

このように、天主教（を含む「西学」）を取り巻く状況が困難になる中、1793年には中国人神父である周文謨が朝鮮に入り、天主教徒の信仰を固めていくこととなる。が、1801年にそれまで蕩平策によって星湖学派の後ろ盾となっていた正祖が死去し、純祖が即位して起きた天主教に対する弾圧（辛酉教難）によって、周文謨神父を始め、李家煥、権哲身、李承薫、丁若鍾等が斬首、丁若鏞や丁若銓等が流配されるに及んで、両班層における天主教徒は殆ど居なくなってしまう。以後、朝鮮における天主教教徒の中心は中人階級に移っていく。この後も、天主教に対する弾圧は1896年の西教禁圧令の解除に至るまで断続的に行われ、1846年には朝鮮人の最初の司祭である金大建神父（1984年に列聖）が、

1866年の第三次弾圧（丙寅教難）では約8000人の信者が殉教している。以上が本報告で言及する「西学」に関する主な歴史である。これら「朝鮮天主教教会」及び「西学」関連士人などを念頭に置きながら、以下、今回の訪問調査について報告を行いたい。

二 「天主教」関連

まず、最初に、韓国天主教に関する報告であるが、現在の韓国天主教の状況は以下の通りである。2005年の韓国統計庁の人口総調査によれば、キリスト教徒は総人口比で天主教（カトリック）が10.9%、基督教・改新教（プロテスタント）が1.3%であり、全人口の12.2%を占める。これは仏教徒の総人口比が22.8%であるから宗教団体としては最大であり、現在の韓国のキリスト教会は多くの教徒を抱え、且つその数を伸ばしている教会である、と言えよう(6)。

そのキリスト教会、特にカトリック教会の韓国における総本山がソウルにある明洞聖堂（正式名称は「ソウル大司教区主教座聖母マリア無原罪のおんやどり明洞聖堂」）である。1895年に完成した当初は「鐘岬聖堂」と呼ばれていたが、1945年の日本からの独立を機に、「明洞聖堂」と名称を変更した。この明洞聖堂が建つ場所は、もともと、朝鮮天主教教会設立に先だって、李承薫や李蘗、権哲身などが天主教教義を学習する場となっていた金範禹（1785年に殉教）の故居であった。そのため、現在でも韓国におけるカトリック信者の精神的よりどころであり、韓国国内はもちろん、海外からも毎年多くのカトリック信者が訪れている(7)。



ソウル明洞聖堂



韓国教会史研究所が入るビル

筆者が訪れた際にも多くの信者が訪れており（前頁写真上）、聖堂内部では、信者の方が静かに祈りを捧げていた。また、聖堂内部には第一章で言及した、朝鮮天主教の創立に関わった人物の肖像画等が掛けられており（左写真）、現在の韓国におけるキリスト教と、朝鮮天主教教会との歴史的つながりが色濃く反映されていると言える。



李承薫(上)と金大建神父(下)

金範禹(上)と李藁(下)の肖像画。

このように、韓国においては、「朝鮮天主教会」はそのまま「韓国カトリック・キリスト教」に繋がるものと意識され、これは日本や台湾、中国とはやや趣を異にしているように感じる。何故なら、中国に於けるカトリック・キリスト教は 18 世紀のイエズス会士の国外への追放をもって途絶し、日本でも同様に鎖国によって徹底的にその活動は弾圧された。また、台湾のカトリック・キリスト教は、その初発を日本や中国と同じように 17 世紀前半まで遡及できるが、鄭成功の台湾統治時に追放されてしまい、その後 1858 年の天津条約によって台湾におけ

る信仰の自由が保障されるまでは、見る影もない。このような状況と比較すると、韓国のカトリック・キリスト教会の背負う歴史は大変特徴的である。後でも述べるが、韓国における「西学」研究が、常に「現代からの視点」を強く意識している、と感じたのは、このような「連続性」がその一因にあると考えている。

以上のような歴史的背景を持っているからであろうか、この「朝鮮天主教会」を始めとする「西学」関連研究の中心である「韓国教会史研究所」は、この明洞聖堂のすぐそばに存在している（前頁写真下）。

この韓国教会史研究所では、顧問である李元淳（ソウル大学名誉教授）先生に現在の韓国におけるカトリック・キリスト教の状況や西学研究の研究動向及び李元淳先生ご自身の研究成果をご紹介頂いた。また研究所研究室である李章雨先生には西学研究関連の文献をご教示頂き、それは本報告にも活用されているが、日本では稀観本に属す資料なども入手することができた。ここで調査・閲覧、入手した資料については機会を改めて発表する予定であるが、西学の流入と朝鮮天主教会、そして韓国カトリック・キリスト教会への連続性を関連的に射程に入れた研究が日本ではあまり見当たらないため、貴重なものになると考えている。

次に、韓国のカトリック・キリスト教の聖地である、切頭山殉教聖地と記念館である。ここは、第一章で言及した、1866 年の丙寅教難の際に多くの信者が殉教した場所であり、その敷地の入り口には、左の写真のような殉教者を祀るモニュメントがある。このモニュメントを見た時、率直に長崎市西坂にある「日本二十六聖人記念館」のモニュメントによく似ている、という印象を持った。事実、



聖地入口の殉教者を祀るモニュメント



切頭山とはその名の通り、頭を切り落とされた場所を意味している。

この敷地内には、豊臣秀吉の朝鮮出兵の際に朝鮮半島から連行され、長崎で殉教した、3人（聖パウロ茨木、弟の聖ネオ茨木、息子の聖ルドビコ茨木）のモニュメントもあり、東アジアにおけるキリスト教のつながりを改めて感じた瞬間であった(8)。この記念館の敷地内には聖堂と博物館があり、韓国におけるキリスト教の歴史を体感することができる。敷地内はまた公園のようにもなっており、様々なオブジェが配置されている(写真左の上)。その中でも中心に配置されているのが、金大建神父の像である(写真左の下)。



敷地内案内板



金大建神父像

この敷地内には、よくカトリック教会内部のステンドグラスや絵画によって示されている、イエスの生涯をモチーフにした石碑が配置されており、筆者が訪問した時にも熱心にその石碑をめぐる信者の方々を見かけた(写真左)。



石碑に見入る信者の方々

右の方々以外にも、大学生か高校生と思われる若い人のグループや幼稚園児のグループ(遠足であろう)など、様々な年齢層の信者と思われる人々が訪れており、現在の韓国における信者層の広さや多さを目の当たりにした。また、写真に

は撮れなかったが、気温が10度に満たない寒空の下で、1866年の教難の際に犠牲になった神父の像(写真左の上)に跪いて祈りを捧げる方や、同じく敷地内にあるマリア像(写真左の下)の両手の間に頭を載せて祈る方もいらつしやり、その敬虔さには頭が下がる思いであった。



神父像とマリア像

写真では確認しにくいですが、このマリア像は「韓服(チマ・チョゴリ)」を着ており、韓国の土地柄を反映したマリア像として大変興味深い。このような「地域性を反映した姿のマリア像」について、筆者は既に言及したことがあるが(注2所掲の拙著)、このような韓国や台湾におけるマリア像(写真左)の姿は、「宗教」が「習合」する一形と見なせるのではないかと考えている。



台湾のマリア像(土産品)



殉教記念館前の教会に立つ聖母子(マリア)像(韓服)

以上は、朝鮮天主教から韓国カトリック・キリスト教を概観するために訪れた場所である。ここに引き続いて、私は次の訪問地である安山市に向かったが、その途中で、いくつかの教会に立ち寄った。その中で現代の韓国におけるキリスト教教会の状況を表している一例を紹介しておきたい。

次頁の写真がそれであるが、案内して下さった弘益大学の李尙奎先生によれば、どちらもプロテスタント系(向かって右側が純福音教会)の教会、左側が改新教(プロテスタント)の教会にそれぞれ特徴的な教会とのことである。このように、様々な宗派の教会がほぼ隣接している状況は韓国では珍しくないようであるが、

私が訪れた台湾や中国で、このような状況(例)は殆ど目にすることがなく、人口比率で多くのキリスト教徒を抱える韓国ならではの、と感じた。また、この場所のすぐ近くには、写真左の下にあるような大変立派な教会(汝矣島純福音教会系)もあり、人口比率で教会の規模、数、ともに東アジア地域では突出している韓国教会の現状が窺えた。



公園を挟んで右手前と左手奥に二種の聖堂が見える。



三 「西学」関連

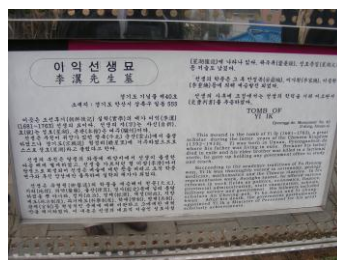
次に、第一章でも言及した、天主教を始めたとする「西学」を本格的に研究した人物であり、朝鮮における天主教への導き役となった星湖李瀼に関連する地である。李瀼が活動の場とした当時の京畿道瞻星里(現在の安山市)には、星湖纪念馆や李瀼の墓地、講学処などが復元され、保存されている。ここでは、星湖纪念馆の学芸研究員である鄭恩蘭先生にご案内頂いたが、現在の韓国における李瀼は「実学派」の先駆(開創者)として再評価されているようで、そのような流れを受けて、この安山市に2002年5月、星湖纪念馆が建設、開館され、墓所や講学処の復元も進められた、とのことである(9)。

星湖纪念馆には李瀼の生涯だけでなく、所謂「星湖学派」、前述した慎後聘や安鼎福、権哲身、丁若鏞などの事跡も紹介され、近年の李瀼に対する再評価の在り方を知ることができた。鄭恩蘭先生にはその他に、近年の「実学派」に対する再評価が「韓国の近代化」の理由、裏を返せば、「何故、近代に入ってすぐに文明化が韓国では進まなかったのか」という関心が歴史学の方面から集まり、それは例

えば李瀼の「西学に対する是々非々の態度」や星湖学派の丁若鏞が持っていた海外認識の先進性や開明性が、当時から評価されていれば、韓国の「近代化」はもっと進んでいたはずだ、と言う主旨のお話を伺った。このお話を伺った当初は、何故、それほど「近代化」という文脈にこだわるのか、あまり明確に理解できなかったが、その背景は、後述する慎後聘の研究者である姜秉樹先生のお話により鮮明に理解することができた。

以上のような近年の実学派への再評価を反映してか、館内の展示物は李瀼が属していた「南人系老論派」の人物で、特に「実学的関心」を示している資料が多く、この土地が輩出した李瀼の「実学派的側面」を強く意識させたものとなっていた。当館のパンフレットに拠れば、李瀼の事跡について近隣の住民が学ぶ「市民講座」のようなものが開催されているようであり、関心の高さを窺わせた。

李瀼の墓所及び講学処は纪念馆からすぐの所にあり、墓道なども整備され、李瀼の墓所には夫人も一緒に祀られていた(写真左)。



纪念馆から墓所へ

この墓所のすぐ脇に講学処があり、訪問時には改修工事のため閉館中であったが、鄭先生のご厚意により中を拝見させて頂くことができた(左写真・上から、講学処外門、講学処「景湖齋」、祠堂である「瞻星祀」)。



当時の雰囲気そのまま、と言うわけにはいかないであろうが、当地の人々の李瀼に対する眼差しや李瀼が学問に励んだと思える空気を感じることができたのは、私にとって望外の収穫であった。この、講学処の景湖齋や号である星湖に用いられている「湖」は、この瞻星里の辺りに李瀼が移り住んだ頃、湖があったからと言う。李瀼はその湖を埋め立てて農業を振興しようとしたことから「重農主義者」という一面も持っており、庶民の暮らしに役立つ「実学」を重んじた李瀼の視線が何に向けられていたのが窺えた。

星湖記念館を後にして、次に向かったのは星湖学派の領袖である安鼎福に関する施設である。安鼎福の講学処は安山市から車で一時間ほど行った京畿道広州市にある。安鼎福講学処に到着した時刻が遅かったためか、内部の拝観は叶わず、外からのみの撮影となった(写真左。上は全景、下は正門)。



しかし、この安鼎福講学所前に設置されている石碑の文章(左写真)から判断すると、1995年にこの講学所は完成しているようであり、安鼎福を始めとする「安氏」一族への崇敬の念が端的に示されていると言える。但し、安鼎福は「星湖学派」のなかでも「西学批判派(攻西派)」と認識されているため、先の「星湖記念館」で見たような近年の「実学派再評価」とはまた別の文脈で顕彰されているのであろう。



以上が、今回「西学」に関連して訪問した地である。韓国における「西学」の流れを駆け足で訪れたが、各所で「現地訪問」しなければ難しいであろう発見やインスピレーションを得るなど貴重な経験ができた。しかし、このような現地訪問で得た財産を、今後の「文献研究」にフィードバックさせることができれば、それは宝の持ち腐れである。そのような意味でも、韓国における調査の最後に、一章で言及した、「西学」に対して最初期に先鋭的な批判を加えた慎後聘の研究者である、韓国学中央研究院の姜秉樹先生に伺ったお話は大変示唆に富むものであった。以下は、姜先生に伺った話を私なりに要約したものである。

まず、慎後聘に対する現代の韓国における歴史的評価について伺ったが、姜先生は次のようにおっしゃった。「慎後聘の『西学弁』における『西学批判』が大変鋭かったため、朝鮮でその後、実学派が育たず、韓国の近代化が遅れた一因となった、と捉える研究者もいる。例えば、歴史学者(科学思想の研究者)たちは慎後聘の発想を「前近代的」として否定的な評価をしている。つまり、『西学(実学)』の発展する可能性を絶ってしまった、という評価である」と。この点に対して私は、「それはあまりに現代からの視点という意識が強すぎると思います。私は、慎後聘の行った批判が、西学の矛盾点をつく、鋭くかつ深刻な内在的批判という特徴を持つものであったのであり、この点は彼の思想性の先進さや見識を評価すべきではないのでしょうか」と申し上げた。この私の無遠慮な応答に対して姜先生

は、「本来そうであるべきだと思います。しかしそれは「勝った国だからその発想」でもあるのです」とお答えになった。私はこのお答えの中に、韓国における歴史研究の難しさ、独特さを感じた。と同時に、先に述べた星湖記念館の鄭恩蘭先生のおっしゃった、「実学派」が再評価される文脈が「近代化」というキーワードと共に語られる理由についても諒解することができた。

ただし、姜先生とのお話しを通して、慎後卿に関する資料から汲み取れる「歴史事実」の分析については共通の認識であり、彼が何故、当時あれだけの「批判」ができたのか、何を意図して行ったのか、等については意見の一致を見た。少なくとも、慎後卿は「西学は国家（もしくは儒学）」にとって危険であると判断したために、あれほどの批判を行ったのであり、その学問的誠意、該博且つ深い分析力は高く評価するに値する、との意見については異論がなかった⁽¹⁰⁾。

おわりに

以上が今回韓国で行った訪問調査の概要であるが、実際に韓国の教会の状況などを見ることによって、現代韓国の人々の信仰（思い）を肌身を感じることでできたのは、何よりの収穫であった。また、星湖李漢を始めとする「実学派」に対する評価の動向も知ることができた。慎後卿一人をとっても、様々な「研究の視点（アプローチの観点）」があり、それら韓国における研究界の視点の有りようが何を意味するのか、という研究も成り立つように思えた。それは、恐らく「歴史認識」として現代の日本や韓国、そして中国などとの関係に横たわる問題を解決する糸口になるのではないだろうか。それは本稿が最終的に意図している目的とそう離れてはいない。

韓国教会史研究所で李元淳先生に、「韓国のキリスト教徒は何故「アジアの奇跡」と呼ばれるほど、人口比率で多いのでしょうか」と不躰にも伺った際、先生は率直に「一筋縄ではありません。私にとってもとても難しい問題です」とお答えになった。

韓国における「西学」とは、歴史的な事実を分析するだけでなく、これからの韓国を考える上でも、大きな研究テーマであり続けるであろう事を確信した現地調査であった。

注

(1) 朝鮮の西学や星湖学派、天主教については以下の研究を参照した。李能和氏『朝鮮基督教及外交史』（朝鮮基督教顕彰社、昭和3年、韓国学研究所、1977年復刻）、関庚培氏『韓国キリスト教史』（澤正彦訳、日本基督教団出版局、1974年）、柳東植氏『韓国のキリスト教』（東洋叢書5、東京大学出版会、1977年）、李元淳氏『朝鮮後期儒学知識人の西教認識と受容の特性・比較文化論の糧として』（『自然法と文化』水波朗・稲垣良典・阿南成一編集、創文社、2004年、所収）、姜在彦氏『姜在彦著作選第2巻 朝鮮の西学史』（姜在彦著、鈴木信昭訳、明石書店、1996年）、鈴木信昭氏「李氏朝鮮に於ける天主教受容時の中人層の役割」（『東洋大学 東洋史研究報告』、『東洋大学文学部史学科研究室、1983年』）、「李朝正祖期における天主教の布教状況に関する一考察・乙巳・珍山両事件の間を中心として」（『史苑』第43巻第2号 立教大学史学会、1984年）、「正祖一五年の辛亥教難について・珍山事件と中人信徒の動向を中心として」（『東洋大学文学部紀要』第44集、史学科編、東洋大学、1990年）、「朝鮮における周文謨神父の天主教布教について」（『東洋大学東洋史研究報告』4、東洋大学、1988年）、「李氏朝鮮天主教史小考」（『歴史と地理』531、山川出版社、2000年2月）他。また、拙著『星湖学派の天主教理解について・中国明末期との比較を通して』（『中国哲学論集』第28・29合併号（九州大学中国哲学研究会、平成15年10月）を参照。

(2) 拙著「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察（一）・祖先祭祀をめぐる問題」（『北九州工業高等専門学校研究報告』第41号、2008年1月）、「台湾におけるカトリック・キリスト教信者の宗教意識に関する一考察（二）・「天后聖母」について」（『北九州工業高等専門学校研究報告』第42号、2009年1月）、「現代中国におけるキリスト教の状況に関する一考察（一）・寧波、上海地区を例として」（『北九州工業高等専門学校研究報告』第43号、2010年1月）

(3) 今回の訪問調査に関連して、お世話になった方々について、ここで特にお名前と所属を記しておくこととする。まず、筆者の韓国における訪問調査の意義を評価し、招聘して下さった、京畿大学教授である南相虎先生。また、南先生の都合がつかなくなった際、快く現地での訪問調査に協力、案内下さった同じく京畿大学教授である李在範先生や西江大学教授である鄭址郁先生。安山市の星湖紀

念館や広州市の安鼎福講学処など、広範囲にわたる「西学」関連施設を案内下さった弘益大学校講師である李尚奎先生。現在の韓国におけるキリスト教の状況や研究資料について詳細に御説明頂いた、韓国「西学」研究の権威でありソウルの韓国教会史研究所顧問(ソウル大学校名誉教授)である李元淳先生、及び研究室長である李章雨先生。安山市星湖記念館の研究員である鄭恩蘭先生。そして現代の韓国における「西学」研究者(専門は慎後聘)であり、韓国学中央研究院(前身は韓国精神文化研究所)百科辞典編纂研究室長である姜秉樹先生。最後に今回の韓国訪問にあたって様々な有益な助言を頂いた富山大学人文学部教授である鈴木信昭先生。この方々の協力、支援無しに今回の訪問調査は実行できなかった。改めて謝意を表しておきたい。

(4) 注1で挙げたほか、鈴木信昭氏の「朝鮮に伝来した漢訳天主教書・一八〇一年辛酉教難の時期まで」(『朝鮮学報』第百五十四輯、朝鮮学会、1995年)が特に参考になる。また、この第二章については注1で挙げた文献等を参考にして成している。

(5) この慎後聘や後出の安鼎福の天主教批判については、注1にある姜在彦氏の著作や拙著を参考にされたい。

(6) この点について鈴木信昭氏は、「『一九九七年版韓国統計年鑑』(一九九八年度版も全く同じ数字)は一九九五年の韓国統計庁による『人口住宅総調査報告書(全国篇)』をそのまま用いて資料を作成しており、そこでは儒教は20(原文は200)万人程度にとどまっている」と述べている(注1所掲『歴史と地理』531)。これは、「儒教徒であること」を自覚している人の少なさを示しているが、他方で「儒教」が「特定の宗教」と言うより、「伝統文化・精神」として深く根付いている証左であるとも言えるのかも知れない。「儒教の国」と称される韓国における、キリスト教と儒教の関係を考察する上で、非常に有益な指摘である。また、2005年の統計調査に拠れば、「儒教徒」と答えた人は「10万人強」であり、さらにその「教徒意識」は薄いと言える。また、金哲秀「韓国における宗教分布の特性と韓国人の宗教性・仏教とキリスト教を中心に」(全炳昊訳『仏教大学総合研究所紀要』第八号、仏教大学総合研究所、2001年3月)も、この点について非常に参考になる。

(7) 以下、韓国天主教については、明洞聖堂(ソウル市中区明洞2街1番地)のHP(<http://www.mdsd.or.kr/>)や韓国天主教発祥の地を紹介した「天真菴聖

地」のHP(<http://old.chonjinam.org/>)等も参照された。

(8) 切頭山天主教聖地及び博物館(ソウル市麻浦区合井洞96-1)に関してはHP(<http://www.jeoldusan.or.kr/>)を参照。一部については日本語でも紹介されている。

(9) 星湖学派については注1所掲の姜在彦氏著書及び拙著を参照。また星湖記念館(京畿道安山市常緑区星湖キル163)については、HP(<http://seongho.jansan.net/>)が参考になる。

(10) この他に一例として、私は、「慎後聘と安鼎福は交流を避けていたように見えるのですが、姜先生はどうお考えでしょうか。当時の李瀼の文章を見ると、李瀼は安鼎福に慎後聘を「経学者」として紹介しているにも関わらず、両者の交流の痕跡が見あたりません。何故そのような痕跡が残っていないのでしょうか。少なくとも両者は「西学(天主教)批判」という点では同じ傾向を持ちますし、安鼎福の天主教批判の文章(天学考)には慎後聘の批判を敷衍しているのではないか、と思われる個所が見えます」と質問をした。これに対して姜先生は「私もそのように感じます。安鼎福にとって慎後聘はいわば「兄弟子」にあたる人ですが、あまり相性が良くなかったのかもしれない。ただ、安鼎福は、慎後聘の父の葬式には出席しているので、全く関係を絶っていたわけではないようです」とお答えになった。星湖学派の人々も、そのような「人間らしさ」を感じることができ、文献史料から当時の人々が立ち上がってくる、そんな思いがした一瞬であった。

・本報告は、文部科学省科学研究費補助「若手研究(B)」(研究課題番号19720011「東アジアの宗族におけるキリスト教思想の影響・儒教規範に基づく家族規範を中心に」)による研究成果の一部である。

(二〇一〇年一〇月一五日 受理)